徳洲会グループ
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP

発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL：03-3262-3133

制作
一般社団法人徳洲会　広報部
TEL：03-3288-5580　FAX：03-3263-8125
Email：news@tokushukai.jp

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

No.1560

静岡徳洲会病院

品質保証施設認証を取得

検体検査標準化や高い精度管理担保

静岡徳洲会病院は品質保証施設認証を取得した。これは、日本臨床衛生検査技師会が運営している第三者評価制度で、検体採取を含めた検査工程のすべてを対象とした品質保証の枠組み。認証施設は全国でも604施設（9月7日時点）と限られ、徳洲会グループでは同院を含め5施設のみ（**表**）。同院臨床検査科は2022年に「超音波検査室の精度認定制度」、25年には「輸血機能評価（I&A）認定」を取得するなど、医療の質の維持・向上や精度管理を担保する第三者評価の取得に積極的に取り組んでいる。

個人認定資格の取得推進も



品質保証施設認証書を持つ上田技師長（左）、認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師の認定書を持つ安本副主任



個人のスキルアップを業務に還元し、地域からの信頼を高めるとともに地域貢献を促進

品質保証施設認証制度は18年12月に施行された「医療法等の一部を改正する法律」をふまえ、従来の精度保証から、より広範な品質保証体制を認定する制度として発展させ、日本臨床衛生検査技師会が22年に開始。

検体採取や前処理、搬送、検査報告、検査値の解釈、妥当性の確認など総合的に審査対象となり、内部精度管理を通じて臨床検査の精度が十分に保証されていると評価できる施設に対して認証を付与している。

認証の対象範囲は臨床化学、血液、一般、免疫、微生物、輸血、細胞、生理、病理、遺伝子の10部門。静岡病院は今春に受審（システム上での書類審査）し、生理と遺伝子を除く8部門の認証を取得した。認証期間は26年6月1日から28年5月31日までの2年間で、2年ごとの更新制となっている。

認証基準は多岐にわたり、①日本臨床衛生検査技師会が主催している外部精度管理調査に2年連続で参加し、調査に参加したすべての項目に関して一定以上の水準であること、②外部精度管理調査でC評価、D評価だった項目に関して是正処置が適切に行われていること、③検査精度の確保に関する責任者の配置、④標準作業書、作業日誌、管理台帳を配備していること（内部精度管理に関する記録を保管し、活用していること）、⑤人的資源の確保（認証対象の検査室に臨床検査技師が常勤していること。適切な研修の実施、継続的な人材育成を行っていることなど）――の5項目。

臨床検査科の上田真路技師長（臨床検査技師）は「患者さんや、検査をオーダーする医師の先生方からの臨床検査科に対する信頼性のさらなる向上のため、24年の夏から準備してきました。検体検査は検査部門のなかでも大きな部分を占めているため、信頼性を客観的に証明する第三者評価の認証を取得したいと考えていました」と説明する。

認証取得に向けたプロジェクトの推進役として、臨床検査科の安本佑真副主任（臨床検査技師）が事務局を担当。安本副主任は徳洲会グループでも数少ない「認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師」の資格を有する臨床検査技師だ。

認証基準を満たすため、2年間、精度管理調査と並行して、まず認証基準を臨床検査科全体に周知。さらに、内部精度管理手順書や内部精度管理マニュアルの作成、精度管理調査でC評価・D評価があった項目に関して原因の究明や解決策などを記録した是正措置報告書の作成など対応を進めてきた。

「約2年後の受審を目指し、認証を取得した8部門のそれぞれに担当者を決めて、部門ごとに書類の作成などに取り組んできました。ゴールを決めて、そこから逆算し、その時々で、すべき課題を設定して、役割を明確にしたうえで担当者に割り振るということを行ってきました。科を挙げての協力体制に支えていただき、期日どおり進捗、認証取得のプロジェクトを円滑に遂行できました」（安本副主任）

他方で安本副主任は、認証を取って終わりではないことを強調する。同認証は2年ごとの更新制であり、今後もPDCA（計画→実行→評価→改善）サイクルを回し続け、継続的改善を図っていく考えだ。

「スタッフの努力や品質管理の成果を形にして“見える化”することで、院内外の信頼性の維持・向上と同時に、達成感を共有することで、スタッフのモチベーションの向上にもつながったと感じています」と上田技師長は振り返る。

国際規格ISO15189も視野

このように同院は施設認証の取得に尽力すると同時に、個々のスタッフのスキルアップにも力を入れ、各種個人資格の取得を後押ししている。認定国際細胞検査士や認定病理検査技師、認定超音波検査士、緊急臨床検査士などの資格保有者が多数在籍し、最近では安本副主任が認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師の資格を取得した。

同資格は「臨床検査全般の分野における精度保証について高度な学識と技術を有する臨床検査技師の育成を図り、より良質な医療を国民に提供することを目的」として、日本臨床衛生検査技師会が設けている認定制度。臨床化学・免疫化学の実務経験5年以上や指定講習会の受講、原著論文や学会発表などにより50単位の取得などの申請資格を満たし、認定試験に合格する必要がある。認定期間は5年間。

「検査部門として、できることに精いっぱい取り組み、責任を果たしていきたいです。少しでも病院全体の高機能化に寄与できればと考えています」と安本副主任は抱負を語る

スタッフ各個人がスキルアップして身に付けた高度な知識・技能が業務に還元されることで、病院としての高い専門性を支え、ひいては外部に対する強力なアピール材料となる。同院は施設認証と個人資格をセットで推進し、地域からの信頼性を高めるとともに、地域医療に対して一層貢献していきたい考えだ。将来的には、臨床検査室の品質と能力に関する特定要求事項を定めた国際規格であるISO15189の取得も視野に入れている。

徳洲会グループの品質保証施設認証取得病院

病院名	所在地
福岡徳洲会病院	福岡県春日市
湘南鎌倉総合病院	神奈川県鎌倉市
榛原総合病院	静岡県牧之原市
岸和田徳洲会病院	大阪府岸和田市
静岡徳洲会病院	静岡県静岡市

徳洲会国際心臓血管セミナーin葉山 19日から湘南国際村センターで開催



会場となる湘南国際村センター

徳洲会は9月19日から2日間、神奈川県三浦郡葉山町にある湘南国際村センター国際会議場で「第4回徳洲会国際心臓血管セミナーin葉山」を開催する。「Focus on Mitral Valve(僧帽弁の最前線)」をテーマに、演者には徳洲会グループをはじめ国内外で活躍する医師を多数招聘。

海外からは国際的なエキスパート陣を多数招聘。「循環器診療の未来を拓くAIと革新的テクノロジー」をテーマにした米国のメイヨークリニック特別セッションも実施し、先端技術の臨床応用を紹介する。国内からも各分野を牽引するリーダー陣が結集。「僧帽弁治療の現在と未来」のセッションでは、診断から高度な治療戦略に至るまで、多角的な議論を展開する予定。

また、新たな取り組みとして「ビデオライブセッション」を実施。事前録画映像を活用する形式で、実際の準備段階から手術のリアルな流れを再現する。循環器にかかわる医師など医療従事者、医学生、企業関係者を対象に参加者を募集中だ。

参加申し込み・詳細はここから

指定管理でV字回復の公立病院

榛原病院を地元テレビ番組が紹介



徳洲会の応援する文化への感謝と継往開来の思いを話す森田院長（左）と八木千乃・看護部長

榛原総合病院（静岡県）が、指定管理者制度を活用して経営再建を果たした公立病院の好例として、地元のテレビ番組で紹介された。

同院は、地元の牧之原市と吉田町による組合が運営していたが、2000年代に入ると医師不足など、さまざまな理由で業績が次第に悪化。閉院寸前のなか10年に同制度を導入し、指定管理者となった当時の医療法人沖縄徳洲会（21年に医療法人徳洲会に統合）が運営するようになった。以来、黒字経営を継続。稼働病床は50床から308床、職員数も倍以上に増えた。

放映後、森田信敏院長は指定管理への移行当時を振り返り「職員の退職が続きましたが、再建の先頭に立っていた茂庭將彦院長（現・名誉院長）には以前からお世話になっており、恩に報いたいと考え私は残りました。ひとりで診療を担うことになりますが、外科医として力を試してみたいと高揚感を覚えました」と述懐。

「多くの方に支援いただき、今は明日の閉院を心配する職員はひとりもいません。恩に報いたい、力を試したいという思いは、世代が変わっても大切にしてほしい」と、継往開来の思いを次代へ託す。徳洲会グループでは同院を第1号として、現在、4病院を指定管理者として運営している。

指定管理で運営する徳洲会グループ病院

- 榛原総合病院
- 和泉市立総合医療センター（大阪府）
- 生駒市立病院（奈良県）
- 公立種子島病院（鹿児島県）

直言

心臓血管外科開設と協力を惜しまない スタッフを育ててくれた徳洲会に感謝

生まれ故郷で都会と変わらない医療をとの思い



大隅鹿屋病院(鹿児島県) 院長 辻 貴裕(つじ たかひろ)

私は鹿児島県の大隅半島にある鹿屋市の出身です。地元の鹿屋高校を卒業し、鹿児島大学医学部へ進学しました。卒業後は東京の日赤医療センターで内科研修を受け、その後、東邦大学大橋病院の循環器内科に入局しました。医師としての仕事を続ける中で、次第に強くなっていったのが、「自分が生まれ育った大隅半島の人たちにも、都会と同じような医療を受けてほしい」という思いでした。都会で最先端の高度な医療に携わるほど、その思いはどんどん強くなっていきました。「田舎だから、鹿屋だから助からなかった」は自分にとっては我慢できない言葉でした。ある程度仕事ができるようになり、卒後約14年目に地元に帰って、循環器の急性期医療に欠かせない心臓血管外科が唯一ある当院に、就職させていただきました。

循環器の最先端急性期医療を提供 心のケア大事にした優しい医療も

目標は2つでした。①地方のハンディキャップを克服し、循環器の最先端の急性期医療を提供することと、②技術だけでなく心のケアを大事にした優しい医療を行うことです。

1つ目についてですが、鹿屋市は人口10万人近い街でありながら、鉄道が通っていない、「陸の孤島」とも言える地域です。以前は大動脈解離や心原性ショックなどの患者さんは、鹿児島市内や他県まで何時間もかけて搬送しなければなりませんでした。東京での経験から、とくに急性心筋梗塞（AMI）が原因の心肺停止（CPA）患者さんに対する経皮的心肺補助装置（PCPS）を利用したカテーテル治療（ECPR）に対する思い入れが強く、積極的に導入していきました。2015年には左室駆出率（EF）10%の48歳の患者さんを、PCPSを挿入したまま自衛隊機を利用し大阪大学附属病院まで搬送し、植え込み型の補助人工心臓（VAD）を施行してもらいました。最近は九州大学と連携を取っていますが、これまで4人の患者さんにVADを植え込み、うち2人は無事に心移植までたどり着いています。このようなことができたのは、当院に心臓血管外科があったからに他なりません。もし徳洲会が大隅半島に進出していなければ、おそらく現在でも心臓血管外科は存在していないと思います。本当に徳洲会に感謝しています。

また、もう一つ忘れてはいけないのが、文句も言わず全面的に協力してくれた病院のスタッフです。看護部、臨床工学科、臨床検査科、放射線科、リハビリテーション科、薬剤部、栄養科、事務部、臨床試験センター、すべてのスタッフが協力的でした。この教育された姿勢は、徳洲会の一番の強みのように思います。このような組織を構築した徳洲会に再び感謝です。

2つ目についてです。患者さん、ご家族の病気に対する不安への対応は、とても重要です。とくに緊急や臨時の受診時の不安は想像を絶するものがあるため、いつでも対応してもらえて、しかも優しくしてもらえ、心も癒やされることが、医療の原点だと思います。私には地元を長い間離れ、また地元が田舎であったことで芽生えた故郷に対する愛おしい思いがあり、いい加減なことはできません。自分の親族、同級生のご家族、学生時代に教わった学校の先生など、お世話になった患者さんがいっぱいいます。大好きで尊敬していた小学校時代の担任の先生を3人看取らせていただきました。手が抜けず責任重大ですが、そのような方たちに少しでも恩返しができたのであれば、自分の人生において、こんなにやりがいがあって幸せなことはありません。

地元出身医師と地域外からの医師 一致協力し真の患者ファーストへ

自分は運良く生まれ故郷で、このような仕事ができ、とても幸運でした。現在、当院には約30人の常勤医師が在籍していますが、地元出身の医師は自分を含め4人です。これが妥当な数字なのか、わかりませんが、これからの徳洲会の地域医療を考えた時に、地元出身の医師のリクルートがもっとうまくいくといいと思います。ただし、これは個人情報の問題などもあり、そう簡単にはいきません。職員からの情報などを頼りに、諦めずに取り組んでいきたいと思います。

地域外から田舎に来て頑張ってくれている医師の気持ちに、地元出身の医師の思いをうまくミックスさせ、真の意味で“患者さんファースト”の優しい地域医療ができるよう、これからも皆で頑張りましょう。

日本褥瘡学会

徳洲会グループから8演題

変わるケアと変わらないケア考える

第28回日本褥瘡(じょくそう)学会学術集会が9月4日から2日間、奈良県で開かれ、徳洲会グループはハンズオンセミナー、パネルディスカッション、一般演題、ポスターで計8演題を発表した。学術集会のテーマは「皆で取り組む褥瘡医療ー変わるケアと変わらないケアー」。



徳洲会グループの褥瘡予防を紹介する磯辺WOC



業務効率に資する新製品などについて発表する富樫WOC



「WOCを中心とした組織体制が重要」と中矢WOC



家口PTは多職種連携下で踵部褥瘡が改善した症例を報告

鎌ケ谷総合病院（千葉県）の磯辺さやか皮膚・排泄(はいせつ)ケア特定認定看護師（WOC）は、ハンズオンセミナーで「徳洲会グループの褥瘡対策連携活動と当院の予防ラウンドにおける産学連携品の活用事例」と題し発表した。

まず、徳洲会グループで取り組んでいる褥瘡対策の仕組みを紹介。褥瘡発生率調査を年2回実施し、全国各ブロックで課題や解決策を共有したり、各ブロック長が中心となり病院・介護施設共通の予防マニュアルを整備したりし、WOC不在の施設でもケアの標準化に努めていることをアピールした。

また、自院の取り組みとして、産学連携品を活用した褥瘡予防ラウンドも紹介。一施設の取り組みをグループ全体で共有し標準化することで、褥瘡対策の精度が上がったことも強調した。

庄内余目病院（山形県）の富樫弘美WOCは2演題を発表した。ハンズオンセミナーでは「洗い流さない洗浄料と保湿・保護ができるおしりふきを現場で使用した経験から」と題し、新しい洗浄料とおしりふきを1カ月間使用し、入院患者さんを対象に従来の排泄ケアと比較したところ、皮膚の状態を悪化させることなく1人当たりのケア時間を約4割短縮できたと報告。一般演題でも、両製品が日々行う褥瘡患者さんの排泄ケアの時短につながり、従来の方法と比べても質を担保できると報告した。

阪南中央病院（大阪府）の中矢逸美WOCは「看護師離職率の変化と褥瘡発生率の長期的な検討」と題し発表。WOC配置後は離職率が上昇した時期でも褥瘡発生率は低く保たれたとし、WOC中心の組織体制を築くことが重要と訴えた。

松原徳洲会病院（同）の家口輝・理学療法士（PT）は、サービス付き高齢者向け住宅の患者さんに、病院と同レベルの多職種連携体制で褥瘡ケアを行い、踵部(しょうぶ)褥瘡が改善した1例を報告。訪問診療医が褥瘡を評価し、薬剤師が外用薬を提案。PTも端坐位訓練やマットレスの提案などで複数が介入し、褥瘡改善につながったと発表した。

仙台徳洲会病院の江口かつら看護師は「手術室はかわったか？救命か皮膚か術中褥瘡予防への意識変容と課題」と題し、術中褥瘡の予防について発表した。術中褥瘡は、手術中の長時間の圧迫や手術特有の体位が原因で生じる褥瘡。江口看護師は、とくに救命が最優先される手術中では褥瘡ケアが後手に回りやすい現状を指摘し、自院では除圧方法など褥瘡対策の研修に取り組んでいることを説明した。

その結果、褥瘡予防の重要性は手術室スタッフの共通認識となっているものの、経験が浅いスタッフほど対策の取り組みが定着せず、研修などを改善することで術中褥瘡予防の質向上につなげる意向を示した。

山内病院（神奈川県）の山田桐絵・管理栄養士がパネルディスカッションで褥瘡治癒に向けた栄養管理を紹介。福岡徳洲会病院の穴井友恵WOCと三原恵理WOCがポスターで「ずれ・圧迫による褥瘡発生予防への取り組み」をテーマに発表した。

病気のはなし 234

「2週間治らない」は注意

歯肉がん

口内炎がなかなか治らない、歯茎の一部が不自然に腫れているといった異変があれば、口腔(こうくう)がんなど別の疾患の症状かもしれない。庄内余目病院(山形県)の荒博範・歯科口腔外科部長は「目安は2週間。がん由来の口内炎は痛みが少ないのが特徴ですから、痛みがあまりない、もしくは2週間以上治らない場合は歯科診療所もしくは口腔外科のある病院の受診をおすすめします」と訴える。

口腔がんの罹患(りかん)者数は、全がんの1～2%程度と少ないが、なかでも歯肉がんは、まれながん。長く無症状で、口内炎様の出来物が口内にできる頃には、やや進行している状態だ。さらに進行すると、歯茎がもこもこと不自然に盛り上がり、やがてあごの骨にまで浸潤、リンパ節や肺などに転移していく。

あまり進行していないうちは抜歯とともに歯茎を一部切り取る手術で済むが、進行するとあごの一部、もしくは下顎(かがく)すべての切除が必要となってくる。肩や足の筋肉、骨を用いたあごの再建術を施行するが、「切除範囲が増えると、どうしてもQOL（生活の質）は落ちてしまいます」と荒部長。



まれな疾患なうえ初期には痛みがないため見逃しがちだが、「かかりつけ歯科医師をもち、『これまでと違う』という違和感を適切にキャッチしてもらうことが大切です」と荒部長は、6～12カ月に1度の定期検診を受けるよう呼びかけている。

第1回徳洲会看護研究発表会

84演題の成果共有し質向上へ

徳洲会看護部門が開催

徳洲会看護部門は8月22日、湘南鎌倉医療大学（神奈川県）を会場に「第1回徳洲会看護研究発表会」を開催した。テーマは「未来を支える看護の探求～徳洲会グループの連携と共創～」。日々の看護実践から得られた成果をグループ全体で共有し、グループのスケールメリットを生かした連携と共創を図ることで、看護の質向上と未来の看護を支える力を創出するのが目的。全国の徳洲会グループ病院から84演題（特別演題1演題、口演46演題、ポスター37演題）の発表があり、当日は会場を4つに分けて学会形式で行った。

徳洲会グループ看護師330人参集



第1会場（口演会場）の様子



第3会場（ポスター会場）の様子



1年以上の準備期間を共にした運営スタッフら

開会式で一般社団法人徳洲会の八木沼正子・看護部門本部長は、全国から集まった330人超の参加者や会場を提供した大学に感謝を表したうえで、「少子高齢化のなかで、看護の力が多くのことを変えていけると、現場のなかで感じているのではないでしょうか。今回は現場から生まれた成果を共有できることをうれしく思います」と強調。“業務改善発表”から“看護研究発表”へと形を変えて初開催したことに触れ、「日々の仕事で積み重ねているデータを活用し、看護の質向上につなげてください」と発表会の意義をアピールした。

その後、参加者は口演2会場、ポスター2会場に分かれ、興味のある演題発表が行われる会場を巡りながら研鑽した。演題は「感染・安全管理」、「退院支援・地域連携」、「教育・人材育成」、「業務改善・DX」、「看護実践・ケア」といった多岐にわたるテーマで構成、グループ病院から日頃の取り組みが集結した。

口演会場では、満席の客席から次々と手が上がり、熱気あふれる議論を展開。ポスター会場でも、発表者の周囲に参加者が密度の高い輪をつくり、実践の工夫や課題について熱心に質問を投げかける姿が見られた。

また、第1会場で実施した特別演題では、診療看護師特定看護師委員会の野津花子・山形徳洲会病院看護副主任（診療看護師）が「特定行為研修修了者の活動に関連する要因の検討：多施設横断研究」と題し発表。グループ内の特定行為研修修了者を対象とした調査結果をもとに、月1回以上の特定行為実践の有無に影響を与える要因を分析。個人的要因よりも、病棟横断的な活動の有無や所属部署といった組織的要因が強く関連していることを示し、修了者が十分な力を発揮するための組織的な環境整備やマネジメントの重要性を訴えた。

閉会式では、まず有田清子・湘南鎌倉医療大学学部長が「現場の困りごとがそのまま研究の問いになっており、深い印象を受けました。今後は施設を超えた共同研究が生まれることを期待しています」と評価。続いて、山上美恵子・介護事業部看護・介護部長は「業務改善から始まった発表会が、真の看護研究へと深化してきたことをうれしく思います。現場の努力が実を結んでいます」と振り返った。

倉掛真理子・業務部長は「身体的拘束の低減など、各施設が業務改善に真摯に取り組んできた成果を実感しました。この取り組みを続けてください」と継続の重要性を指摘。坂本眞起代・総務・人事部長は「長年の教育の積み重ねが今回の成功につながりました。グループのビッグデータをもとに、外部に対しても積極的に発信していきましょう」と期待を寄せた。

八木沼本部長は「徳洲会グループは現在、年間約1,700万人もの患者さんを診ています。これほど多くの患者さんに医療・看護を提供している実績と自負をもち、そのビッグデータを活用して自分たちの看護を形にしていってください」とエール。

最後に、照屋いずみ教育部長が「施設の枠を超えて知識や経験を共有し、互いに学び合うことこそが徳洲会グループの強みです。本日得た学びをそれぞれの現場にもち帰り、明日からの看護実践に生かしてください」と締めくくり、閉会した。

日本顎顔面インプラント学会誌

長・東京西病院医長の論文 難症例への長期予後が掲載



「臨床の知見を論文として形に残すことは重要」と長医長

東京西徳洲会病院の長太一・歯科口腔外科医長が執筆した「下顎前突症を伴う上顎多数歯欠損に対して外科的矯正治療およびインプラント治療を行った1例」と題する論文が、日本顎顔面インプラント学会誌に掲載された。

同症例は、骨格性の下顎前突に多数の歯の欠損が重なった難症例。咬合の基準となる歯がほとんど存在しない状態であったため、補綴専門医と密に連携を取り、新製した義歯を用いて下顎の移動位置や咬合平面（かみ合わせの高さや位置の基準）を事前に評価・設定した。

その基準のもと、両側下顎枝矢状分割術による骨切り手術を施行して、下顎骨を適正位置へ移動。術前・術後矯正を経て上顎に4本、下顎に1本のインプラントを埋入し、固定性補綴装置を装着。上顎固定性装置の装着から約9年が経過した現在も、良好な咬合状態と高い咀嚼機能性を維持している。

長医長は「かみ合わせがない状態から位置をどうつくるか試行錯誤を重ねました。長期的予後を含めて学会に評価されたことは非常にありがたいです。臨床の知見を論文として形に残すことはきわめて重要だと考えます。後進の指導も含め、今後も臨床と研究を両立させていきたいです」と意欲的だ。

看護学生への指導スキル学ぶ

湘南鎌倉医療大学 実習指導者講習会

湘南鎌倉医療大学（神奈川県）は8月4日、2026年度実習指導者講習会の開講式を行った。同講習会は看護学生に対する実習指導者（予定者を含む）が、効果的な実習指導を行うことができるよう必要な知識・技術を習得することが目的。カリキュラムは14科目にわたり、11月6日の最終講義まで総授業時間は190時間に及ぶ。

同大学では20年度から同講習会を実施しており、22年度からは厚生労働省認定の講習会として運営。これにより徳洲会グループ外の医療機関などに所属する実習指導者も受講可能となった。今年度はグループ内外から40人の看護師が受講。

開講式では、名前を読み上げられた受講者一人ひとりが力強く返事を行い、意欲の高さが伺えた。続いて荒賀直子学長が「社会状況の変化とともに看護教育の内容も変化してきていますが、対人サービスの仕事では、基本となる大切なことは変わらないと思います。ぜひ実習のなかで看護という仕事の素晴らしさを伝えながら指導していただけるとうれしいです」と呼びかけた。



「看護という仕事の素晴らしさを伝えながら指導してほしい」と荒賀学長

同大学を運営する学校法人徳洲会の福島安義理事長（医療法人徳洲会最高顧問）は「学生たちにとっては、実習現場での経験や指導内容が占めるウェイトが大きく、看護観を養っていく重要な時期となります。この講習会を通じて得たことなどを生かしながら、学生たちにしっかりと向き合っていただけたらと思います」とエールを送った。

開講式の終了後、出席確認の方法や図書館など学内施設の利用方法の案内、キャンパス見学などオリエンテーションを実施。続けて、「看護理論」の講義を行った。

同講習会責任者の小森直美・看護学部看護学科教授は「実習指導者の方々には、看護実践の現場での患者さんなどとのコミュニケーションの取り方や、それぞれの看護観、また、教科書では教えることのできない“心のこもった看護”を臨床で伝えていただければと考えています」と期待を寄せていた。

湘南鎌倉病院

子どもの成長と交流が目的 建長寺合宿で救護班を担う

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は8月20日、建長寺を舞台に行われた「鎌倉てらこや」主催の合宿で、救護班を務めた。同イベントは地域の子どもたちの交流と成長を目的とした2泊3日の合宿で、小・中学生約80人、大学生約100人が参加。



開会式に駆け付け参加した子どもたちにエールを送る小林院長

開会式には、同院の小林修三院長も駆け付け、「世のため人のため、困っている人を助けること、そして助けられた思いを、またどなたかに返すこと、こういった循環の大切さをいろいろなことから学んでください」と挨拶。また、救護班として参加した水落隆聖・救急救命士と廣海聡・救急救命士は「我慢をしない、無理をしない、異変を感じたらすぐに知らせること、この3つを守って事故なく楽しみましょう」と呼びかけた。



熱中症予防を呼びかける水落・救急救命士（左）と廣・救急救命士

水落・救急救命士は「病院を離れた状況であっても、何かあった時は冷静に対応して活動を支えたいという気持ちで取り組みました」、廣・救急救命士は「当院は救急搬送の多い病院ですので、ふだんから培ってきた知識や技術を、合宿に参加する子どもたちに、しっかり還元したいと考えました」と意欲を見せていた。

マタニティ坐禅が好評博す 建長寺に延べ500人超参加

湘南鎌倉総合病院が開催しているマタニティ坐禅が好評だ。これは、同院が2017年から建長寺で定期的に開いている坐禅会。生後10カ月までの赤ちゃんとその父母が参加可能で、延べ500人以上が参加している。



初開催から10年目を迎え、ますます好評のマタニティ坐禅

坐禅は心や呼吸を整え、心身を深くリラックスさせる修行法。助産ケアの一環として、建長寺という特別な場所で坐禅体験を行い、妊婦さんや産後の母親と助産師が時間を共有することで、出産準備や産後のメンタルケアに好影響が期待できるため継続している。

6月22日には29回目のマタニティ坐禅を開催。5人の赤ちゃんを含む20人が参加し、同院の桐谷佳耶助産師らが引率。境内にある應眞閣（大庫裡）で、はじめに同寺教学部の伊東良禅和尚が座り方や姿勢、呼吸法など指導したうえで、10～15分間の坐禅を3セット行った。静寂のなか、微動だにしない妊婦の方々や、母親の周りでハイハイする赤ちゃん、わが子を気にかけながらも坐禅に集中する母親の姿が見られ、時折、警策（修行者の肩を打つ板状の棒）の音が畳敷きの大広間に響いた。

終了後、双子を帝王切開で出産したという母親は「産前にも参加しました。帝王切開は怖かったですが、坐禅体験で得たことを思い出すことで、恐怖心が和らぐなど分娩中とても役に立った実感があります」と笑顔。

徳洲会グループ医師 “Best Doctors in Japan”に21人

「医師間で信頼されている医師」を相互評価

徳洲会グループ病院に所属する 21 人の医師が「Best Doctors in Japan 2026-2027」に選出された。「ベストドクターズ」は過去 30 年近くにわたり、医師間の相互評価（ピアレビュー調査）をとおし「医師間で信頼されている医師」を 2 年おきに選出している。医師同士が相互評価する継続的な調査として医療界最大級。米ベストドクターズ社が主催し、450 以上の専門分野と副専門分野から世界各国の医師 5 万 3,000 人超（日本では約 7,100 人）を選出している。受賞者の声を紹介する。

南部徳洲会病院（沖縄県）
眞鍋良彦・放射線治療科医長〈初選出〉

定位照射で全国屈指



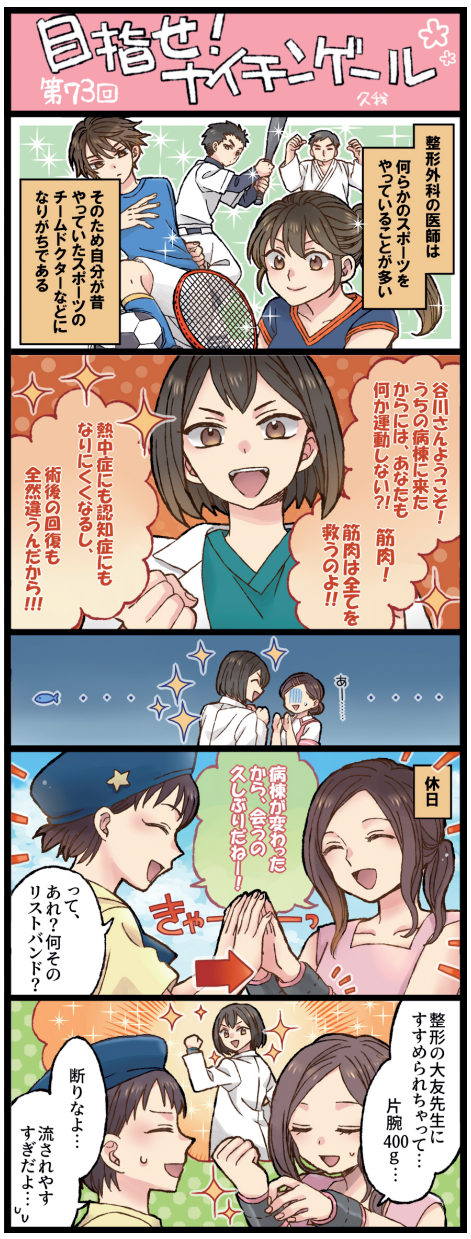
当院は、サイバーナイフによる体幹部定位照射が年間 120～130 例と全国トップクラスで、これまで 700 例以上の治療を手がけました。その実績を評価いただけ、うれしく思います。放射線治療への不安を丁寧に説明し、納得いただける診療を心がけています。

中部徳洲会病院（沖縄県）
内間恭武・消化器外科主任部長〈7回目〉

ロボット支援手術を底上げ



全国的な学会・講演活動を評価いただいたと思います。後進の育成をつねに考え、患者さん一人ひとりに応じた診療を心がけています。徳洲会グループのロボット支援手術の底上げにも取り組みます。



井谷史嗣・腹部総合ヘルニアセンター長〈9回目〉

安全確実な手術を追求



安全確実な手術を目指し、良いと思う手技は積極的に取り入れてきました。尊敬する先輩に教わった「鬼手仏心」を忘れず、ロボット支援による鼠径ヘルニア治療の標準化を目指します。

神戸徳洲会病院
松岡俊三副院長（心臓血管内科）〈2回目〉

わかりやすい診療を心がけ



患者さんが何のために治療をするのか、しないのかを理解し、その場にいないご家族にも自分で説明できるよう、わかりやすい診療を心がけています。今後も双方が納得のいく医療を続けていきます。

和泉市立総合医療センター（大阪府）
光冨徹哉総長（呼吸器外科）〈10回目〉

肺がん治療を長年追究



肺がんの外科治療や分子標的治療の研究・診療に長年取り組んできたことを、同じ医師の方々に評価いただいたと受け止めています。支えてくださった皆さまに感謝いたします。

田中秀典・副院長兼呼吸器センター長〈初選出〉

地道な診療を継続



日々、地道に診療を続けてきたことを評価いただいたのかもしれません。患者さんの期待や希望に沿えるよう心がけ、「呼吸器疾患なら和泉で」と言っていただけるよう努力を続けます。

野崎徳洲会病院（大阪府）
小泉雅彦・放射線科センター長〈8回目〉

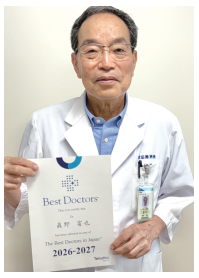
根治から緩和まで対応



学会発表や、がん専門人材の育成など、院外での交流が多かったことが評価につながったと思います。身体に優しく根治から緩和まで対応できる放射線治療を、院内外を問わず提供してまいります。

吹田徳洲会病院（大阪府）
眞野富也・副院長兼アイセンター長〈10回目〉

患者さんの最善にこだわる



何が患者さんにとって一番良いのかを考えて診療してきました。それは、これからも変わりません。医師として、この先ずっと患者さんのために、たゆまぬ努力を重ね、精進してまいります。

※和田英路・副院長（整形外科）〈5 回目〉、多田弘人・呼吸器外科部長〈10 回目〉、蒲生和重・整形外科部長、岡田あすか呼吸器内科部長も選出。

葉山ハートセンター（神奈川県）
浅井徹・心臓血管外科特別顧問〈5回目〉

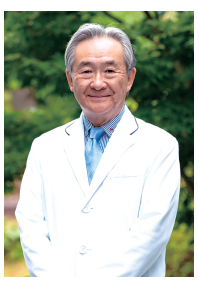
チームでベストを提供し続け



患者さんに何がベストかを、つねにチームで考え、重症・高齢・緊急でも決してお断りしない診療を行っています。低侵襲 MICS 僧帽弁形成術など、より良い治療を目指し、早期に安心して日常生活へ戻れるように努めてまいります。

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）
小林修三院長（腎臓内科）〈6回目〉

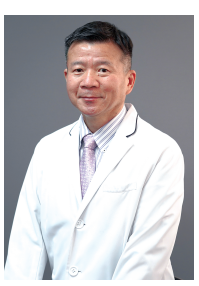
生活背景まで診る！



紹介患者さんが多かったことや、診療の動機づけを加えたわかりやすい説明、学術活動を評価いただいたと思います。患者さんの生活背景まで考えて診療にあたり、後輩の指導にも力を注いでいます。

上村博司・泌尿器科主任部長兼前立腺センター長〈10回目〉

最先端治療や治験にも取り組む



前立腺がんなど泌尿器がんの最先端治療や治験に多く取り組んできたことを、評価いただいたと思います。

患者さん一人ひとりと向き合い治療を続けながら、前立腺がんや泌尿器科の適切な薬物治療の確立を目指します。

日髙寿美・腎臓病総合医療センター長〈3回目〉

患者さんの腎臓と人生を守る



多発性嚢胞腎の診療や腎移植など、幅広く手がけてきたことを評価いただいたと思います。患者さんの考えをよく聞き、「腎臓病総合医療センターに来て良かった」と思っていただける医療を、多くの方に届けたいです。

藤井正一・外科統括部長〈7回目〉

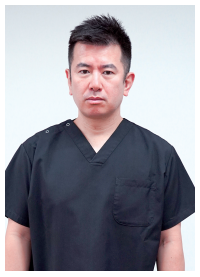
外科の魅力をもっと若手に



臨床も学術活動もつねに全力で取り組んできました。外科診療の基本を守りながら、最新の知識・技術へ更新し続ける姿勢を保っています。若手に外科の魅力をもっと伝えていきたいです。

二村謙太郎・外傷センター部長〈2回目〉

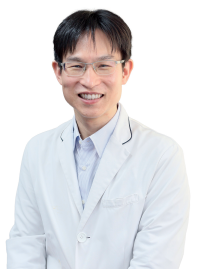
礼節を保つことを大切に



患者さんや職員、他院の先生方に対し、常日頃から礼節を保つことを大切にしています。関東圏の重症外傷の最後の砦として、外傷センターの医療体制を今以上に拡充していきたいと考えています。

村井太郎・放射線腫瘍科部長〈初選出〉

患者さん個々に寄り添う



学会活動や広報活動を評価していただいたと思います。エビデンスと患者さん個々の事情のバランスを大切にし、構想している複数の臨床試験を軌道に乗せていきたいと考えています。

千葉西総合病院
中村喜次・院長代行心臓血管外科主任部長兼低侵襲心臓手術センター長〈4回目〉

寄り添う治療と最先端治療に尽力



患者さんに寄り添う治療を続けながら成績を落とさず、最先端治療の実績を積み重ねてきた結果だと思います。世界有数のロボット心臓手術の実績を土台に、冠動脈への新たな治療も進めていきます。

増淵達夫・頭頸部外科部長兼頭頸部腫瘍センター長〈4回目〉

多職種で患者さんの最良を



多職種の職員と日々精一杯、頭頸部診療に取り組んだ結果だと思います。一人ひとりの生活や社会的背景を考え、患者さんにとって最良の治療を提供するよう心がけています。